

山姥の話

楠山正雄

青空文庫

山姥と馬子
やまうば まご

一

冬の寒い日でした。馬子の馬吉が、町から大根をたくさん馬につけて、三里先の自分の村まで帰って行きました。

町を出たのはまだ明るい昼中でしたが、日のみじかい冬のこのですから、まだ半分も来ないうちに日が暮れかけてきました。村へ入るまでには山を一つ越さなければなりません。ちょうどその山にかかった時に日が落ちて、夕方の方のつめたい風がざわざわ

吹ふいてきました。馬うまきち吉なんは何なんだかぞくぞくしてきましたが、しかたがないので、心こころの中に觀かんのん音のんさまを祈いのりながら、一いっし生しょう懸けん命めい馬うまを追おつて行いきますと、ちようど山の途とちゆう中ちゆうまで来きかけた時とき、うしろから、

「馬うまきち吉うまきち、馬うまきち吉うまきち。」

と、出だしぬけに呼よぶ者ものがありました。

その声こえを聞きくと、馬うまきち吉うまきちは、襟えりもと元もとから水みずをかけられたようにぞつとしました。何なんでもこの山やまうばには山やまうば姥ばが住すんでいるという言いい伝つたえが、昔むかしからだれ伝つたえるとなく伝つたわっていました。馬うまきち吉うまきちもさつきからふいと、何なんだかこんな日に山やまうば姥ばが出でるのではないか、と思おもつていたやさきでしたから、もう呼よばれて振ふり返かえる勇ゆう気きはあ

りません。何でも返事をしないに限ると思つて、だまつてすたすた、馬を引いて行きました。ところがどういふものだか、氣ばかりあせつて、馬も自分も思うように進みません。五六間行くと、またうしろから、

「馬吉、馬吉。」

と呼ぶ声が聞こえました。しかもせんよりはずつと声が近くなりました。

馬吉は思わず耳をおさえて、目をつぶつて、だまつて三足行きかけますと、こんどは耳のはたで、

「馬吉、馬吉。」

と呼ばれました。その声があんまり大きかったので、馬吉は

はつとして、おも思わず、

「はい。」

といいながら、ひよいとうしろを振り向くと驚おどろきました、もう一間けんとへだたっていないうしろに、ねずみ色のぼろぼろの着物きものを着きて、やせっこけて、いやな顔かおをしたおばあさんが、すつとそこに立たっているのです。そして馬吉うまきちの顔かおを見ると、にたにたわらと笑わらつて、やせたいやらしい手で、「おいで、おいで。」をしました。

うまきち馬吉は、

「あッ。」

といったなり、そこに立たちすくんでしまいました。するとおばあさんはずんずんそばへ寄よつて来きて、

「馬吉、馬吉。大根をおくれ。」

「馬吉がだまつて大根を一本抜いて渡しますと、おばあさんは耳まで裂けているかと思うような大きな、真つ赤な口をあいて、大根をもりもり食べはじめました。もりもりかむたんびに、赤い髪の毛が、一本一本逆立ちをしました。」

「うまでもなく、それは山姥でした。」

山姥は見る見る一本の大根を食べてしまつて、また「もう一本。」と手を出しました。それから二本、三本、四本と、もらつては食べ、もらつては食べ、とうとう馬の背中にのせた百本あまりの大根を、残らず食べてしまうと、もうとつぷり日が暮れてしまいました。」

ありつたけの大根だいこんをのこ残らずやってしまったので、馬吉うまきちはあ
とをも見みずに、馬うまの口をぐいぐい引ひつぱって、駆かけ出して行いこう
としました。一いっし生懸命しょうけんめい駆かけ出して、やつと一町ちやうも逃にげたと思おも
うころ、山姥やまうばは大根だいこんをのこ残らず食たべてしまつて、またどんどん
追おつかけて来きました。間まもなく追おいつくと、こんどは、

「馬うまの足あしを一本ぼん。」

といいました。もう馬吉うまきちは生いきている空そらはありません。しか
たがないので、これもぶるぶるふるえている馬うまを山姥やまうばにあずけ
たまま、から身みになつて、どんどん、どんどん、駆かけ出だしました。
するとどうしたものか、気きがせくのと、道みちが暗くらいので、よけいあ
わてて、どこかで道みちを間違まちがえたものとみえて、いくら駆かけても駆か

けても、里さとの方ほうへは降おりられません。行いけば行くほど山ふかが深ふかくなつて、もうどこをどう歩あるいているのか、まるで知しらない山の中の道みちを、心こころ細ほそくたどつて行くばかりでした。

とうとう山けんがつきて谷たにのような所ところへ出でました。ひよいと見みると、そこに一軒けんうちらしいものかたちの形かたちが、夜目よめにもぼんやり見みえました。何なんでもいい、とにかく入はいつて、わけを話はなして、今夜こんやはたのんで泊とめてもらおうと思おもつて、うちの前まえまで来くるとすぐ、とんとん、戸とをたたきました。でも中はしんと静しずまりかえつて、明あかり一つもれてきません。ぐずぐずしているうちに、山姥やまうばが追おつかけて来きて、見みつけられては大たいへんだと思おもつて、馬吉うまきちはかまわず戸とをあけて、中はいへ入はいりました。

はい 入つてみると、中は戸障子もろくろくなくない、右を向いても、
 ひだりむ 左を向いても、くもの巣だらけの、ひどいあばら家でした。

「なるほど、これではいくらたたいても返事をしないはずだ。人
 の住んでいないうちなのだ。それでもしかたがない。今夜はそつ
 とここにかくれて、夜の明けるのを待つことにしよう。」

と、ひとり言をいひながら、馬吉はそつと上がつていきますと、
 そこはそれでも二階家で、上は物置のようになつていました。

「同じかくれるにしても、二階の方が用心がいい。」と思つて、
 うまきち 馬吉は二階に上がつて、そつとすすだらけな畳の上にごろりと
 よこ 横になりました。横になつて、どうかして眠ろうとしましたが、
 なん 何だか目がさえて眠られません、始終外の物音ばかりに気を

取られて、胸をどきどきさせていました。

二

するとその晩夜中過ぎになつて、しつかりしめておいたはずのおもての戸がひとりでにすうつとあいて、だれかが入つて来た様子です。

「はてな。」と思つて、馬吉がこわごわはい出して、二階からそつとのぞいてみますと、折からさし込む月の光で、さつきの山姥が、台所のお釜の前に座つて、独り言をいつているのが見えました。

「今日は久し振りでごちそうだったなあ。大根もうまかった。」

馬ももうまかった。あれでうっかりしていて、馬吉に逃げられな

ければ、なおよかったのだけれど、残念なことをした。」

馬吉はそれを聞くと、ぶるぶるふるえ上がって、頭をおさえ

てちぢこまってしまいました。

しばらくすると、山姥は大きな口をあいて、大あくびをして、

「ああ、くたびれた。眠くなった。今夜はどこに寝ようかな、白

の中にしようか。釜の中にしようか。下に寝ようか。二階に寝よ

うか。そうだ、涼しいから二階に寝よう。」

といいました。

馬吉は「もうこんどこそは助からない。」と思いました。

「山姥やまうばのやつ、おれが上あにいるのを知しつて、上あがつてきて食たべ
るつもりだろう。ああ、もうどうしようもない。観音かんのんさま、観か
音んのんさま、どうぞお助けたすけ下くださいまし。」
こころ
こう心こころの中に念ねんじながら、今いまにも山姥やまうばが上あがつてくるか、上あ
がつてくるかと待まつていました。

ところが山姥やまうばは、すぐにはなかなか上あがつてきませんでした。
やがてまた大きなあくびをして、

「二階かいに寝ねればねずみがさわぐ。臼うすの中なかはくもの巣すだらけ。釜かまの
中あたは温あかたで、用心ようじんがいちばんいい。そうだ、やつぱり釜かまの中なかに
寝ねよう。」

と、独り言ひとりごとをいいながら、大きなお釜かまのふたを取とつて、中はいに入はい

ったかと思うと、やがてぐうぐう、ぐうぐう、高いびきで眠ねむつてしましました。

二階かいからこの様子ようすを見ていた馬吉うまきちは、そつとはしご段だんを下おりました。そして抜き足ぬあし差し足あしお庭にわへ出て、いちばん大きな石いしを抱かかえ上げて、「うんすん、うんすん。」いいながら、運はこんで来きました。そして「うんとこしよ。」と、石いしをお釜かまの上うへにのせて、上かみから重おもしをしてしましました。お釜かまの中なかからはあいかわらず、ぐうぐう、ぐうぐう、高いびきが聞きこえました。お釜かまに重おもしをしてしまうと、こんどはまた、お庭にわから枯かれ枝えだをたくさん集あつめて来きて、小ちいさく折おつては、お釜かまの下したに入いれました。

ぴしりぴしり枯かれ枝えだを折おる音おとが、寝ねている山姥やまうばの耳みみに聞きこえ

たとみえて、山姥やまうばはお釜かまの中で、

「雨あめの降ふる夜よは虫むしが鳴なく。

ちいちい鳴なくのは何なに虫むしか。

虫むしよ鳴なけ、鳴なけ、雨あめが降ふる。

ぱらぱら、ぱらぱら、雨あめが降ふる。」

と歌うたいました。

山姥やまうばが心こころ持もちそうに、ぱちぱちいう枯かれ枝えだの音おとを雨あめの

音おとだと思おもって聞きいていますと、その間まに馬うま吉きちは枯かれ枝えだに火あをつ

けました。お釜かまのそこがだんだんあつくなってきた、そのうちじ

りじり焦こげてきたので、さすがの山姥やまうばもびつくりして、

「おお、あつい。」

といつて飛び上がりました。そしていきなりふたを持ち上げてとび出そうとしますと、上から重しがのしかかっている、身動きができません。山姥はおこつて、お釜の中で、「きやツ、きやツ。」とさけびながら、狂いまわりました。

馬吉はかまわずどんどん枯れ枝を燃やしながら、

「馬喰うばはあはどこにいる。」

寒けりやどんだん焚いてやる。

あつけりや火になれ、骨になれ。」

と歌いました。

とうとうお釜が上まで真つ赤に焼けました。その時分には、山姥もとうにからだ中火になって、やがて骨ばかりになってしま

いました。

山姥やまうばと娘むすめ

一

むかしあるところに、お百ひやくしやう姓せいのおとうさんとおかあさんが
 ありました。夫婦ふうふの間あいだには十とおになるかわいらしい女の子が
 ありました。ある日おとうさんとおかあさんは、野のらへお百ひやくしやう姓せいのし
 ごとをしに行くとき時に、女の子を一人ひとりお留守番るすばんに残のこして、
 「だれが来きてもけつして戸とをあけてはならないよ。」

といいつけて、鍵かぎをかけて出て行きました。

女の子は一人ひとりぼっちと残のこされて、さびしくって心こころ細ほそくつてしかたがありませんから、小さちいくなつていろりにあたつていました。するとお昼ひるごろになつて、外そとの戸をとんとん、たたく音おとがしました。

「だあれ。」

と、女の子がいました。

「わたしだよ。すぐにあけておくれ。」

と、おばあさんらしい声こえが聞こえました。

「でもあけてはいけないんだつて、おとうさんとおかあさんがそういったから。」

と、女の子はいいました。

「何なんだつて。よしよし、あけてくれなければ、この戸とをけ破やぶつてやる。」

こういつていきなり戸とに手をかけて、みりみり動うごかしながら、
両りょう足あしでどンドン、どンドン、けつけました。女の子はびつくりして、困こまつて、しかたがないものですから、戸とをあけてやりま
した。

戸とをあけると、ぬつと、おそろしい顔かおをした山姥やまうばが入はいつて来き
て、炉ろばたに足あしをなげ出だして、

「おお、寒さむい、寒さむい。」

といいました。

「おばあさん、何しに來たの。」

と、女の子はたずねました。

「おなかがすいた。早く御飯の支度をしろ。」

と、山姥はこわい顔をしていいつけました。

女の子はぶるぶるふるえながら、台所へ行つて、御飯のいっば

い入ったおはちを持つて來ました。山姥はおはちのふたをあけ

て、手づかみでせつせと御飯をつめこみながら、たくあんをまる

ごと、もりもりかじつていました。その間に女の子は、そつとう

ちから抜け出して、逃げて行きました。

どんどん逃げて行つて、山の下まで來ると、御飯を食べてしま

った山姥が、いくらさがしても女の子がいないので、大それた

こつて、

「おう、おう。」

といいながら追^おつかけて来^きました。ずいぶん一^{いっし}生^{しょう}懸^{けん}命^{めい}駆^かけたのですけれど、山^{やま}姥^{うば}の足^{あし}に小^{ちい}さな女^にの子^こがかなうはずはあり
ませんから、ずんずん追^おいつかれて、もう一^{ひと}足^{あし}で山^{やま}姥^{うば}に肩^{かた}をつかまれそうになりました。女^にの子^こは夢^{むちゆう}中^{ちゆう}で一^{いっし}生^{しょう}懸^{けん}命^{めい}逃^にげますと、山の上からしばを背^せ中^{なか}にしよつて下^おりて来^くるおじいさん
に出^であいました。

「おじいさん、おじいさん。山^{やま}姥^{うば}が追^おつかけて来^くるから助^{たす}けて
下^{くだ}さい。」

と、女の子はいいました。おじいさんは、

「よし、よし。」

といつて、背中のしばを下ろして、その中に女の子をかくしました。

すると山姥が追っかけて来て、おじいさんに、女の子はどこへ行ったとたずねました。おじいさんがわざと、「あそこに。」といつて、向こうに積んであるしばを指さしますと、山姥はいきなりそのしばに抱きつきました。するとそのしばはちようど崖の上に立てかけてあったものですから、山姥は自分のからだの上におもい重みで、しばを抱えたまま、ころころと谷そこへころげ落ちました。そのひまに女の子はどんどん逃げて行きました。すると山姥はまた谷そこからはい上がって、「おう、おう。」といいな

がら、あとから追つかけて行きました。

女の子がまた一生懸命逃げますと、また一人のおじいさんが、そこでかやを刈っていました。

「おじいさん、おじいさん。山姥が来るから助けて下さい。」と、女の子がいいますと、おじいさんは「よし、よし。」と、刈つてあるかやの中に隠してくれました。

やがて山姥が追つかけて来ますと、おじいさんはわざと向こうの崖の上にあるかやのたばを指さしました。山姥がいきなりかやのたばに武者振りつきますと、はずみですべて、ころころと谷そこころがりました。その間に女の子は、またどんどん逃げて行きました。

二

そのうちとうとう大きな沼ぬまのふちに出ました。やがて山姥やまうばも谷たにそこからはい上あがって、また追おっかけて来きました。女の子はもうこの先逃さきげて行くことができなくなつて、沼ぬまのふちに立たつている大きな櫛かしの木ののぼ上に登のぼりました。すると山姥やまうばが追おつついて来きて、

「どこへ行つた、どこへ行つた。どこまで逃にげたつて逃にがすものか。」

といいながら、きよろきよろそこらを見みまわしますと、木の上

に登^{のぼ}っている女の子の姿^{すがた}が、沼^{ぬま}の水^{みず}にうつりました。山姥^{やまうば}はいきなりそのうつった姿^{すがた}をめぐけて、沼^{ぬま}の中に飛び込みました。

女の子はその間に木の上から飛び下りて、沼^{ぬま}の岸^{きし}のくまぎさを分^わけて、逃^にげて行きますと、一軒^{けん}の小屋^{こや}がありました。中^{ちゆう}へ入^{はい}ると、若い女^{わか}の人が一人^{ひとり}、留守番^{るすばん}をしていました。女の子はこの女の人に、山姥^{やまうば}に追^おわれて来たことを話^{はな}して、石^{いし}の櫃^{ひつ}の中^{ちゆう}へかくしてもらいました。

すると間^まもなく、山姥^{やまうば}はまた沼^{ぬま}から上^あがって、どんどん追^おっかけて来^きました。そして小屋^{こや}の中^{ちゆう}に入^{はい}って来^きて、

「女の子が逃^にげて来^きたろう。早^{はや}く出^だせ。」
とどなりました。

「だってわたしは知らないよ。」

すると山姥は疑い深そうに、鼻をくんくん鳴らして、

「ふん、ふん、人くさい、人くさい。」

といました。

「なあに、それはわたしすずめが雀を焼いて食べたからさ。」

「そうか。そんなら少しすこ寝かしておくれ。あんまりか駆けてくたびれた。」

「おばあさん、おばあさん。寝るのは石の櫃ひつにしようか、木の櫃ひつにしようか。」

「石の櫃ひつはつめたいから、木の櫃ひつにしようよ。」

こう山姥やまうばはいつて、木の櫃ひつの中はいに入はいって寝ねました。

山姥やまうばが櫃ひつの中はいに入ると、女おんなは外そとからぴんと錠じょうを下おろしてしま

いました。そして石いしの櫃ひつの中ちゆうから女おんなの子こを出だしてやって、

「山姥やまうばを木きの櫃ひつの中ちゆうに入れてしまつたから、もう大丈夫だいじょうぶだ。」

といつて、太ふとい錐きりを出だして、火ひの中ちゆうにつつ込こんで真まつ赤かに焼やき

ました。この焼やいた錐きりを木きの櫃ひつの上うへからさし込こみますと、中ちゆうで山や

姥まうばが寝ねぼけた声こゑで、

「何なんだ、二十日はつかねずみか、うるさいぞ。」

といいました。その間まに女おんなは櫃ひつに穴あなをあけて、ぐらぐら煮にえ立た

つているお湯ゆを穴あなからつぎ込こみますと、中ちゆうで、

「あついで、あついで。」

とさけびながら、山姥やまうばはどろどろに煮にえくずれて、死しんでし

まいりました。女は山姥やまうばを殺ころして、女の子といっしよにうちへ帰かえりました。この人もとは山姥やまうばにさらわれて、こんな所ところに来ていたのです。

青空文庫情報

底本：「日本の諸国物語」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年4月10日第1刷発行

入力：鈴木厚司

校正：土屋隆

2006年9月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

山姥の話

楠山正雄

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>